

長さが1メートルほどで危ないので手を付けないでおきました。

このような体験はこれ1回だけでした。

九個荘尋常高等小学校に通学する子供たちは、通学路に近い田んぼ路を通って近道をしたものですが、女の子が機銃掃射で狙われたことがありました。

たまたま怪我はなかったのですが、通学する小学生が危険な状態にあるというので、分散授業をすることになりました。

昭和20年頃は、学年ごとに点野、池田、葛原に分けて、午前中は寺で勉強することになり、学年ごとに通学しました。

7、8年前の同窓会で木屋の岩田先生が、即円寺の分散授業で教えに行っていた、と話されたのを聞きました。

空襲があると火があっちこっちで上がって怖かったです、藁葺き屋根に火が付いて炎が高くあがって燃え立った時の印象が忘れられないほど強く残っています。

夜に空襲警報が鳴ると、眠たくて駄々をこねて防空壕へ入るのを嫌がったのを覚えています。

それに田んぼへ逃げたら何とかなるという気持ちもあったように思います。

二つ上の姉は入ったが、私と二つ下の妹は嫌がるので、母は2人を防空壕へ入れるのにてこずったらしいです。

村の30軒の家が、いつ燃えるのかとても不安な日々が続きました。

艦載機が大阪湾から上がって京都の方へ向かう様子も忘れられません。

夜、大阪市内で空襲があると、火の雨が降るように見えました。

また、昼間に空襲があると、2、3時間後には晴れていても真っ暗になるんです。煙がただよい、灰が落ちてくる。

灰が田んぼの間の水路に落ちると、どじょうやふなが死んで浮いていることがありました。

田植えの時期は水が少ないので、そこに灰が落ちると魚が浮いていました。

鶏の餌にしようと捕ったこともありました。

父は20年の1月に召集されて八連隊に入隊し、外地へ行くというので、母と私達子供2人が面会に行ったことがあります。

その時の大阪市内は丸焼けでした。

父は終戦の時はソウルにいたそうです。

家内の兄は枚方の禁野火薬庫で働いていましたが、昭和14年3月の爆発事故で亡